

# 小林謙吉訳『西洋流別奇談』

孝子

# の原書と翻訳

——黎明期の翻訳小説をめぐって——

飛田英伸\*

## 一 はじめに——『流別奇談』の発掘

柳田泉の『明治初期の翻訳文学』（昭和十年）は、明治以降に少しずつ現れはじめた翻訳小説の出版が織田純一郎訳『<sup>奇事</sup>花柳春話』（明治十一〜十二年）に至って本格化するという歴史を、具体的な作品を網羅することによって初めて描き出した文献であり、今日でも参照に耐える研究書である。同書の第一部に当たる「明治の翻訳文学研究」を新潮社刊行の『日本文学講座』第四卷（昭和二年二月）から連載した際、柳田はその冒頭において、「最近二三年明治文学研究が一種の流行めいた勢ひになつて来ると同時に、翻訳文学の方面でも様々、従来未知の資料が掘り出されることになつた<sup>(1)</sup>」と記し、自らの著述が、関東大震災を契機とした明治文化研究の隆盛と、それに伴う資料発掘の活発化の成果とし

て生まれたものであることを述べる。そして、「この研究資料、即ち古翻訳文学書の蒐集の点で大に後進のわたし共が感謝すべき人々には、石川巖氏と斎藤昌三氏とを第一に挙げなければならない<sup>(2)</sup>」と記し、特に石川巖・斎藤昌三両名による古書蒐集の恩恵に与ったことを打ち明ける。

この『日本文学講座』における連載の初回において、柳田は『花柳春話』以前、即ち明治十一年以前の翻訳文学書は、数が甚だ少ない<sup>(3)</sup>としつつ、「最近石川巖氏斎藤昌三氏は小林謙吉訳の『西洋孝子流別奇談』（明治七年）を発見した<sup>(4)</sup>」と伝える。柳田がその発見を報告する小林謙吉訳『<sup>孝子</sup>西洋流別奇談』は明治七年五月に大阪の宝文堂大野木市兵衛から和装本二冊で刊行され<sup>(5)</sup>、航海中に遭難した親子が離別の後に再会するという一種の冒険譚をその内容とする。新たに発掘されたこの作品は、昭和初期の研究者たちの間でささやかな注目を集めた。

まず、発見者の一人であった石川巖は柳田の論文を承け、『西洋孝子流別奇談』に就て『明治文化研究』第四卷五号、昭和三年五月）を著した。石川は「本そのものが聊珍とする丈のもので、内容的には何等参考とすべきものを持たない<sup>(6)</sup>」としつつも、「たゞ明治初期の翻訳小説として最初のものであり、殊に仏文から訳したといふことは特に注意して置く必要があらう<sup>(7)</sup>」とも記し、その作品の価値が希少性のみにあるわけではないことも指摘した。また、本間久雄『明治文学史』（昭和十年）は、『流別奇談』を「わが国の婦女童幼——少くもさういふ西洋の作物に接してゐないものを読者層として試みられた<sup>(8)</sup>」「啓蒙的翻訳」の例として特に紙数を割いて紹介し、流行が本格化する前の黎明期の翻訳小説としてそれに焦点を当てた。

「明治初期の翻訳小説として最初のもの」とする位置づけは何をもって翻訳小説とするのかによって変わりうるが、渡部温訳『通俗伊蘇普物

語』（明治六年）のような物語集を除き、単行本一冊以上の長さに及ぶ物語から成る作品に限定すれば、明治以降に初めて制作された作品の中で『流別奇談』が最も早いものであることは、管見から判断する限り、現在でも言える<sup>(8)</sup>。

さらに、昭和初期の研究者たちは深く言及しなかったが、見返しに「友鳴松旭筆受」と添えられるように、『流別奇談』は幕末から明治にかけて同じく宝文堂から刊行された長編読本『俊傑神稲水滸伝』（文政十一年「一八二六」序）明治二十八年<sup>(10)</sup>）を岳亭丘山から引き継いだ知足館松旭も関与して作られており、江戸から明治へと至る小説の変遷を考えるうえでもおおいに注目される作品でもある。

『流別奇談』は長らく埋没していた作品であり、文学史の展開に直接的に大きな影響を与えたとは考えにくいものの、以上のように『花柳春話』以前の翻訳小説として注意を集める点も多く有している。しかし、研究者たちが関心を寄せたのは昭和初期にとどまり、以後、この作品に大きな注目が集まることは今日まで起こっていない。

もっとも、注目が一過性のものに終わった大きな原因は、その原書が不明であったことにもあるだろう。原書に関して、『流別奇談』の凡例には次のように記される。

此書原書は西洋紀元千八百六十七年【我朝慶応式年寅年に当る也】  
仏国出版ヲルレンドルフ氏の著す所なり標号して「レクチュール」  
と謂ふ今再是を抄訳して西洋孝子流別奇談と題名を附す文辞は俚諺  
俗語を用ひ専ら婦女子童蒙にも通じ易からしめん事を要とす

（凡例一オ）<sup>(11)</sup>

ここには原書がフランスの書物であることが示され、著者や書名も明記されている。だが、柳田が「オルランドルフは出版者の名か著者の名かこれだけでは不明であり（同名の出版者はある）、書名も簡に失うので正しくは何といふか未詳である<sup>(12)</sup>」と言うように、「レクチュール」という書名は漠然としすぎており、ここから原書にたどり着くのは困難である。

ところが、原書に関する注目すべき事実もすでに指摘されている。それは明治八年に神戸で創刊されたキリスト教系新聞『七一雑報』を調査した勝尾金弥「七一雑報」の子供読み物（『日本のキリスト教児童文学』平成七年）が明らかにしたもので、『七一雑報』の第三巻二十六号（明治十一年六月二十八日）から三十二号（同年八月九日）にかけて連載された「西洋昔物語」の内容が『流別奇談』とおおむね一致するといふものである。勝尾はまた、『流別奇談』では「治安<sup>(13)</sup>」と「満利<sup>(14)</sup>」となっている物語中の人物の名前が「西洋昔物語」では「ジョン」（「ジョン」と「メレイ」（「メレー」）となっていることを指摘し、連載の初回に「これは訳書にあらず洋人の物語りしを筆記せしものなり看官<sup>(15)</sup>そのころして読み玉へ」（二）とあることから、「西洋昔物語」は『七一雑報』に関係していたアメリカ人がフランス語の原書を英訳して読み聞かせたことから成立したという説を唱えた。

英語話者によるフランス語文献の利用という勝尾の説は、『流別奇談』および「西洋昔物語」の原書の特定に大きなヒントを提供する。むしろ、「西洋昔物語」を英語で読み聞かせた話者が用いうる文献の選択肢はその話者のフランス語の能力に応じて変わってくる。しかし、「西洋昔物語」は計五回の連載に収まる短編であり、その内容も複雑なものではない。したがって、その原書は一般の仏語話者が読む書物よりはむしろ、

初学者向けの書物である可能性が高いと推定される。

以下、本論文では、まず、以上の推定に基づき、『流別奇談』および「西洋昔物語」の原書を明らかにする。つづいて、『流別奇談』の訳文を原文および「西洋昔物語」の訳文と比較することでその翻訳のあり方について検討する。以上において、黎明期の翻訳小説について考えるための一端を示すことを試みたい。

## 二 『流別奇談』の原書

結論から述べると、『流別奇談』の原書と考えられるのはオレンドルフ (Heinrich Gottfried Ollendorf) の *Key to the Exercises in the Method of Learning to Read, Write and Speak a Language in Six Months, Adapted to the French* (一八四三年) に収められる “Histoire de Jean et de Marie” という題の短編の物語である。凡例で示されている「レクチュール」(lecture) という語は題名にはなく、あるいはこの語を含む題名を有する書も存在するのかもしれないが、管見の限り、該当する書は見当たらないため、差し当たりこの書の一八六七年パリ刊行本を原書としておく。その題名の通り、この書は英語話者向けのフランス語問題集であり、『流別奇談』に基づいた物語はその最後に当たる二百五十二番目の問題文として置かれている。なお、この物語がオレンドルフの手に成るものなのか、他の作者の作品なのかは不明であるが、後述するように、子供がフランス語を学習するという内容を持つことからすると、オレンドルフの脚色が少なからず含まれるようにうかがえる。

注意すべきは、この問題集にはそれに対応する教師向けの英語の教授本 *A New Method of Learning to Read, Write and Speak a Language in*

*Six Months, Adapted to the French* (一八四三年) があり、それぞれの問題文の英訳が掲載されていることである。“Histoire de Jean et de Marie” の訳文も “The History of John and Mary” という題で存在する。したがって、「西洋昔物語」の方はフランス語から英訳を経て訳したというよりはむしろ、こちらの英訳に基づいて訳された可能性の方が高いと考えられる。

オレンドルフはドイツの人物で、パリに拠点を置いてドイツ語、フランス語、英語などの複数の外国語の学習書を作成および出版した。<sup>(14)</sup> Ollendorf Method と呼ばれる方法を適用し、六ヶ月での速習を謳ったその学習書は、学校での教育というよりはむしろ旅行や移住に伴う独学での外国語習得の需要に応えるものであったとも指摘されており、<sup>(15)</sup> 十九世紀において流行した。オレンドルフが新しいメソッドとして提唱したその学習方法は文法項目ごとに課を設け、疑問文とその応答を基本とする短文の翻訳で習得を図るといふもので、今日では Grammar-Translation Method として分類される。問題集にまとめられた練習問題も、基本的には “Avez-vous le pain? Oui, Monsieur, j'ai le pain. Avez-vous votre pain? J'ai mon pain.” (p. [1]) のような短文による問答の連続で成り立っており、最後の数題のみ、長文の読み物となっている。なお、例文や問題文は各言語の教授本で多少異なっており、“Histoire de Jean et de Marie” および “The History of John and Mary” を収めるのは英語版のフランス語問題集およびその教授本のみである。

オレンドルフの学習書は明治期の日本でも流行し、山本半司編『英語六ヶ月間速成新法』(明治二十年)、井上勤訳『六ヶ月間英語卒業書』(明治二十一年)、<sup>(16)</sup> 紅林貞方訳『六月卒業英學自在』(明治二十一年)などが刊行された。先行研究では指摘されていないが、このうち井上和紅

林の訳書は「西洋昔物語」の原書と考えられる英語版のフランス語の教授本に基づいている。

たとえば、井上の『六ヶ月間英語卒業書』の第一課は最初に“Have you?” “Yes, I have.”の二文を「貴君ハお持デスカ」「ハイ持ッテオリマス」という訳とともに掲げ、続いて“The hat.” “The paper.” “The soap.” “The sugar.” “The sat.” “The butter.” “The broom.”の七語を「帽子」「紙」「石礫」「砂糖」「塩」「牛酪」「箒木」の訳とともに載せる。<sup>(8)</sup>これに対し、オレンドルフの英語版フランス語教授本の第一課では次のように英文と仏文が併記される。

Have you?	Avez-vous?
Yes, Sir, I have.	Oui, Monsieur, j'ai.
<i>The.</i>	<i>Le, and, before a vowel, or h</i> <i>mute, l'.</i>
The hat.	Le chapeau.
Have you the hat?	Avez-vous le chapeau?
Yes, Sir, I have the hat.	Oui, Monsieur, j'ai le chapeau.
The bread.	Le pain.
The salt.	Le sel.
The soap.	Le savon.
The sugar.	Le sucre.
The paper.	Le papier.
	(p. [1]) <sup>(9)</sup>

両者を比較すると、井上訳本がこの教授本をもとに作られていること

がうかがえる。井上訳本にはもう一単語“The broom.”「箒木」も加わるが、第一課に“The broom.” “Le balai.”を載せる本も存在する<sup>(20)</sup>。前述したように、例文は教授本ごとに異なっており、井上訳本と最も強い対応関係にあるのは英語版のフランス語教授本である。

また、紅林の『六月卒業英学自在』も、最初の課で定冠詞Theとともに“The hat.” “The bread.” “The salt.” “The soap.” “The sugar.” “The paper.”を掲げており、<sup>(21)</sup>井上訳本と同様、英語版のフランス語教授本に基づいて制作されたと考えられる。なお、井上訳本と紅林訳本とともに“The History of John and Mary”は掲載していない。

このように、井上と紅林はともにオレンドルフの教授本で仏文の対訳として掲げられていた英文を利用して英語の教科書を作成したことが推定され、オレンドルフの学習書の中でも英語版のフランス語教授本が特に流通していたこと、その受容がフランス語の教材としてのみにとどまらず、英語の教授にも利用されたことがわける。外国語の教授法としてオレンドルフの方式を参考にする場合、英語話者向けの教授本が明治期の教育者にとっては最も利便性に長けていたはずであり、学習者も多かったフランス語の教授本が入手もしやすく、特に利用されたのであろう。

そもそも、オレンドルフの教授法は、簡易な方法で外国語を習得させるものとして、明治初期から積極的に語学教育の現場に導入することが図られていた。文部省の学監を務めたデイビッド・マレー (David Murray) が長崎、兵庫、大阪、京都の学校を視察し、明治八年に提出した報告書には、外国語教育に関する提言の第一条として次のように記される。

文部省所轄外国語学校ニ於テ日本ノ児童ニ外国語ヲ教授スルニ今一層簡易精正ノ方法ナカルベカラズ之レヲ為スニハオルンドルフノ体裁ニ從ヒ其話法ヲ斟酌シテ用キバ可ナラン<sup>(22)</sup>

この提言はオレンドルフを日本に最初に紹介したものとして扱われることがあるが、『流別奇談』は明治七年に刊行されており、オレンドルフの学習書はこれ以前にもすでに流通していた。『流別奇談』が大阪で刊行され、「西洋昔物語」が神戸で発行された『七一雑報』に連載されたことからすると、マレーの提言自体、大阪や兵庫におけるオレンドルフの学習書の普及を踏まえたものであったとも考えられる<sup>(24)</sup>。

『流別奇談』の訳者である小林謙吉は同じく宝文堂から刊行された『世界都郡往来 歐洲仏国之旅』（明治六年序）を著しており、万笈閣江島喜兵衛から『世界国手引』（明治七年）も出している。また、小林好謙の名で宝文堂から『通俗英吉利会話篇』（明治五年）を出版している。『流別奇談』の刊記に示される備中倉敷の人という以外の詳しい履歴は不明であるが、小説家であったわけではなく、外国語に通じる者として翻訳を行なったと見られる。知足館松旭が記した序文には、次のように、小林の訳稿が出版の企図以前に存在していたことが示唆される。

方今西洋学盛大に及び事外邦の往事伝聞も横文に録して最詳なり中にも仏国に遺れる話説あり之を翻訳して秘する人あり予素より好癖あれば其書を乞て摸採し之に画図を挟み洋学執心の婦幼童男の伽とす

（序一丁オウウ）

この記述に基づく、『流別奇談』は、「之を翻訳して秘する人」すなわち小林から訳稿を入手した松旭がそれに加筆して成立したらしい。小林の訳稿が「秘する」ものであり、出版を企図して作られたものでなかったとすれば、それは小林のフランス語学習の産物であったという可能性が想定される。あるいは、その他の著作から考えると、小林はフランス語の教授者であり、教授のための材料として訳稿を作成したのかもしれない。だが、いずれにせよ、重要なのは学習者に翻訳を課す問題集であったということにおいて、訳者としての小林が学習者と同じ立場にあったということである。翻訳が学習者の課題である以上、たとえ小林が教授者であったとしても、訳稿を作ること自体は問題集に対する一学習者の行為と隔たりはない。その点で、訳者としての小林は学習者の側にいると見なせる。『流別奇談』はいわば学習者の側から生み出された翻訳なのであり、それが読本作家の手を経て世に出たのである。

一方、「西洋昔物語」の方は訳者についての記載がなく、前に引用したように、冒頭に「これは訳書にあらざる洋人の物語りしを筆記せしものなり」と記される。この記述に従えば、『七一雑報』の関係者であろう宣教師の西洋人が語った物語を筆記者が訳したという成立過程が想定されよう。物語を語った西洋人がオレンドルフの教授本の英訳をもとに語ったとするならば、その教授本はその西洋人が所持していたものである可能性が高い。その場合、その西洋人が教授本を所持していたのはフランス語を教授するためであったとも、自らフランス語を学習するためであったとも考えられるが、井上訳本や紅林訳本の存在を踏まえるならば、その西洋人は英語版のフランス語教授本を材料として英語を教授していたと見ることも十分可能だろう。事実、『七一雑報』の発刊したアメリカン・ボードが京都に同志社英学校を創設したように、聖書を読むため



の言語を教授することも宣教師の重要な役割であった。また、フランス語教授本所収の英訳文を英語学習に転用することは、“The History of John and Mary”の前に置かれる二百五十一番目の問題文の英訳を翻訳の練習問題として使用する井上訳本においても行われており、「西洋昔物語」自体が教育の現場で生み出されたという可能性も考えられる。

学習者と同じ立場で翻訳を行った小林とは異なり、「西洋物語」を伝えた西洋人はおそらく教授本の英訳を読み上げたのであり、翻訳は行っていない。翻訳を行ったのは日本人の記者であり、西洋人はあくまでも語り手としてのみ存在する。つまり、語り手となった西洋人は学習者と立場を共有せず、専ら教授者側の立場にいたと言える。『流別奇談』が学習者の側から生み出されたと思えるのに対し、「西洋物語」は教授者の側から生み出されたと思えるのである。

西洋人が語ったとされる「西洋昔物語」が教授本に由来すると考えられることは、小林から松旭へと書き継がれた『流別奇談』が問題集を出所とすることと明確な対をなす。一方が西洋の教授者側から伝えられ、キリスト教を伝道する新聞の記事として翻訳されたのに対し、他方は日本の学習者側から生み出され、読本作家の手を経て和装本として出版された。この対比はテキストにどのように反映されたのだろうか。両テキストのおおまかな差異に関しては、すでに前掲の金尾論文でも述べられるところであるが、新たに判明した原文と比較しつつ、その翻訳のあり方を改めて検討したい。

### 三 「西洋昔物語」の翻訳

“Histoire de Jean et de Marie”は七ページに収まる短い物語で、その

内容はインドからフランスへの航海の途中で船難に遭ったジャンとマリイの兄妹が苦難の後に父と再会するというものである。前述したように、既存の作品であったのか、オレンドルフの創作なのかは不明であるが、ジャンとマリイが母からフランス語を教わり、父が残した聖書を読んでいたことが父との再会につながるという展開になっており、オレンドルフの手でフランス語学習者用の読み物として仕立てられた部分を有することが推測される。

二つの翻訳のうち、原文との距離がより小さいのは、教授者側から伝えられた「西洋昔物語」の方である。『流別奇談』では原文の内容が大きく変更されたのに対し、「西洋昔物語」では原文のあらすじがほぼそのまま踏襲されている。

もっとも、訳文の文章においては「西洋昔物語」の方も原文からの隔たりは大きい。英訳“The History of John and Mary”と「西洋昔物語」の冒頭はそれぞれ次の通りである。

There was a merchant who went to India with his wife. He made there a large fortune, and at the end of a few years he embarked for France, which was his native country. He had a son and a daughter. The former, aged four, was called John, and the latter, who was only three, was called Mary. When they had proceeded about half way, a violent storm came on, and the pilot said they were in great danger, because the wind drove (*pousser*) towards some islands, against which shipwreck was unavoidable. The poor merchant having heard this, took a large plank, firmly fastened on it his wife and both his children; he was going to fas-

ten himself to it, but had no time; for the vessel having struck against a rock, (*toucher contre un rocher*), split, (*s'ouvrit*), and all the crew (*et tous ceux qui étoient dedans*) fell into the sea. (p. 468)

いつの頃にやありけん昔しフランスの一商人某は妻もるともインドへ近きある都会に数年の間足をとどめて生業に深く心を用ひしかば数多の財貨を儲しのみか二人の子までも産みもうけたり扱今は行末も安心ければ故郷へ立帰り楽しく共にくらさんものと家財を取り纏め旅の用意を整へて其地を出帆したりしが間もなく海上難風に逢ひてはや舟も打沈むべき有様に舟子も今は一同の命覚束なしと呼びければかの商人某は手早く浮板を取出し妻子をしかとゆひつけし程もあらず荒波に舟は二ツに打裂けてみな散りくへに流れ失せ影さへ見へずなりにけり

(一)

両者を比較すると、「西洋昔物語」が原文の文章を逐語的に訳したものであることがわかる。冒頭に「これは訳書にあらず洋人の物語りしを筆記せしものなり」とあるように、「西洋昔物語」は原文を忠実に翻訳したものではなく、原文の内容を再話したものとなっているのである。その再話に用いられる文体は平易なものであり、特別難解な語彙は見られない。また、『花柳春話』以降の訳文が漢文訓読体を基本とし、主として音読みの漢語によって構成されたのに対し、「西洋昔物語」では「商人」に「あきうど」「都会」に「みやこ」という読みを当てるように、漢語を訓読みすることがなされている。さらに、「程もあらず荒

波に」のように近世小説に多用される掛詞を用いた七五調の表現も取り入れられており、これは他の箇所でも「西も東も白真弓」(一)、「訪ふへもなき岩が根はいはでもしるき無人島」(一)のように頻用される。総じて言えば、漢文訓読体に基づいた『花柳春話』以降の翻訳小説が、原文の忠実な翻訳には至らないものの、その文体によって従来の小説との差異化を積極的に示すのとは異なり、「西洋昔物語」はむしろ従来の小説の文体に依拠する部分が多いのである。

“The History of John and Mary”が『七一雑報』に掲載される読み物の素材に選ばれたのは、聖書が物語中のキーマイテムになっているからに他ならないだろう。“She had in her pocket a New Testament (*un évangile*) and a prayer-book (*un livre de prière*). She used them to teach her children to read, and to know God (*et pour leur enseigner à connaître le bon Dieu*).” (p. 469) とあるように、無人島に流れ着いた後、ジョンとマリーの母親は、四歳と三歳の幼い子供に新約聖書と祈禱書を使ってことばを教え、神への信仰を説いた。母親は無人島で亡くなるが、ジョンとマリーは母親の言いつけを守って神への祈りを欠かさず、聖書を暗記するまで読み込んだ(“These two children never missed praying to God: they read their books so often that they knew them by heart.” (p. 470))。そして、十年以上の時を経て、この聖書が二人に父親との再会をもたらすことになる。黒人の国での再会の場面は次のように記される。

This white man, who had felt great astonishment on seeing a girl of the same color as himself, wondered still more (*le fut bien davantage*) when he heard her speak in his own language. “Who

taught you to speak French?" inquired he (*lui dit-il*). "I do not know the name of the language I speak," answered she: "it is my mother's language, and she it was who taught it to me. We have also two books in which we read every day."

(p. 472)

黒人の国で自分と同じくフランス語を話す白人のマリーを見て興味を覚えた男性に対し、マリーは母親と二冊の書を通してその言語を学んだと答える。この後、その書物を見せてほしいと男性が言い、ジョンが聖書を持ってきたところ、その聖書に男性の署名があり、彼が二人の父親であったことが判明する。聖書による言語の習得と信仰の実践が最後に幸福をもたらすのである。

オレンドルフの学習書において、この物語は、学習の功徳を象徴するものとしてその末尾に配置されるが、「西洋昔物語」においては、それがキリスト教の布教という文脈に置きなおされた。物語は、「神に祈念をこらへて」三人の行末百千鳥祈りに暇なかりける」(一)「she resolved to submit to the will of God, and to do all in her power (*faire son possible*) to bring her children up well" (p. 469)) や「我なき跡は二人して中よくくらし怠らず神に誠を尽せかし」[...] 神の恩みに何か又世にでる事もありもせば教の道をよく守り此聖書を父母のかたみと思ひ日々に読みては神を祈れよ」(二)「Remember, however, that you will not be alone, and that God sees all you do. Never miss (*manquer*) praying to him night and morning." (p. 469)) のように、母親による信仰の実践や子供たちへの教育のさまを伝える記述や、「われ／＼が身は神の守らせ玉ひぬればよしや危難事のあるとても神の恩みのなからん

を」(一)「do you know that God our Father (*que notre père le bon Dieu*), is here, and that he will prevent these men from hurting us?" (p. 470)) のように、子供たちへの信仰の浸透を伝える記述を取り込みつつ再話された。特に、猿を神として祀る異教の信仰を打破することを試みてジョンが語った次のことは、読者に対する呼びかけを多分に含むものであった。

汝等未だ悟らずや猿は万物の霊なる人間におとりたるものなればこそ我毒害に命を落せり若又尊き神ならばなどか我等の手に死すべきや凡そ生きたしいけるもの世界の万物有情無情にかはらず我等の大神の造化玉はぬものとなし夫故にこそ何時までか無量の福を被此とはであたへ玉ふのみか我等の命を昼夜となく護り玉ふその深き恵みの程実に此世の言もて譬へられず此言露々狐疑玉ふな

(三)

If your monkey had been a God, I could never have killed him; have I not been stronger than he? We must worship the great God, the Creator of heaven and earth, and not such an ugly beast. (p. 471)

原文において、猿はジョンたちに殺されたことを根拠に神であることが否定される。それに対し、訳文では猿が「万物の霊なる人間」に劣るものであるために殺されたとされる。原文が単に猿が神でないことを言うのみであるのに対し、訳文は人間と猿とのあいだの優劣を問題にし、猿を神とすることの不当を言うのである。訳文の説くところを約めれば、



万物の創造者である「大神」を信仰することこそが「万物の霊なる人間」にふさわしいことであり、「大神」を信仰してはじめて「万物の霊なる人間」の本来の姿が獲得されるということになる。人は万物の霊」ということは元来、『書経』泰誓上に「惟天地万物父母、惟人万物之霊」（惟れ天地は万物の父母にして、惟れ人は万物の霊なり）とあるのに由来するが、たとえば明治七年改正の連語図の第一に「神は天地の主宰にして人は万物の霊なり」と掲げられたように、明治初期の教育界では「神」との対において理解することも起こった。訳者は教場に浸透しつつあったこの対に依拠する形で、読者を「大神」への信仰に導こうとしたのである。

このように、「西洋昔物語」は言語の習得を信仰の実践と結びつけてその功德を説いたオレンドルフの教授本の物語を、布教の媒体として利用すべく再話されたものであった。母親の無人島での教育の期間が二年（“two years” (p.469)）から「五年」<sup>（五つとせ）</sup>（二）に延長されるといった差異も多少あるが、再話の内容がもともとの物語を大きく逸脱することではなく、宣教師たちにとって“The History of John and Mary”が大きな改変を施すことなく利用できる有用な素材であったことがうかがえる。

#### 四 『流別奇談』の翻訳

一方、読本作家の手を経て世に出た『流別奇談』の方は「西洋昔物語」に比べ、原書からの逸脱がより大きくなっている。『流別奇談』においても「西洋昔物語」と同様、原文の忠実な翻訳は行われていないが、こちらは読本作家による再話としての性格が色濃く出ている。七ページに収まる物語は、和装本二冊に及ぶまで引き伸ばされ、「仏蘭西」<sup>（ふらんす）</sup>国の

模理斯<sup>（もりす）</sup>親子身の上話」「治安満利同胞不測に助受る話」「治安同胞禁獄に繋るゝ話」「模理斯父子奇遇立身青雲の話」の四章構成で再話された。その冒頭は次のようなものである。

夫西洋の紀原千四百年代は我皇国の時代に於ては新田足利争戦の頃に当るべし諸皆頃<sup>（さてその）</sup>は世界も漸く「亜細亜」「欧羅巴」「阿弗利加」などの三大州の有綽而已は世に知る斗りの時代にて未だ航海家【外国渡海船の事也】も不自由なる時節にして船も最不便なる疎造にて如何なる利益有と雖も危ふき荒海へ乗係る杯の事考<sup>（かんが）</sup>発す者もなかりけるが這時に當つて茲に「仏蘭西」国の都府【都府とは洛の事也】「巴里斯」<sup>（ぱりす）</sup>「巴里斯」といへるは彼国の大都会繁昌の地なり」と云所に住ける一個の貧き賈人<sup>（あきうどあり）</sup>有て皆名を模理斯と云ぬ

（上一オウウ）

原文が“il y avait un marchand qui était allé dans les Indes avec sa femme (p.156)”と始まるのに対し、『流別奇談』では多くの加筆が行なわれている。その加筆は、読解を補助する説明を加え、物語をわかりやすくするとともに、より具体的な設定を加え、物語を読みごたえのあるものにするに寄与している。まず、「西洋の紀原千四百年代」という設定を追加し、続いてそれが「我皇国の時代に於ては新田足利争戦の頃に当るべし」と補足する。また、商人がインドに住むところから書き始めるの原文とは異なり、商人がインドへ赴く前の時点から物語を説き起こすとともに、適宜割注を用いて補足説明を加える。さらに、原文では商人の名が“Jean Maurice” (p.161) であることは聖書の署名を見て親子関係が判明する際にはじめて明かされるのに対し、冒頭で「模理斯」

という名を示して人物をより具体的に描くと同時に、物語をよりわかりやすい形に整理する。

このように、物語をわかりやすくするという志向が加筆の一半を支えていることが見てとれるが、一方で、その文体は「西洋昔物語」ほど平易なものではない。たしかに、松旭が序文で「婦幼童男の伽とす」と述べていたように、漢語に読みが付きされるその文体は特別読むのが難しいというわけではない。しかし、「西洋昔物語」が「商人」に「あきうど」、「都会」に「みやこ」と当てていたのに対し、同じ読みを「賈人」と「洛」に付与するところを比較しても、平易性が前者に劣ることは否定できない。

この両者の差異を宣教師たちが作る新聞の文体と、江戸以来の読本の文体の差異として捉えることもできるが、松旭が単なる「婦幼童男」ではなく、「洋学執心の婦幼童男」としていたことを踏まえると、別の要因も考えられよう。すなわち、『流別奇談』の文体は、「婦幼童男」によって多少難解な「賈人」や「洛」に「あきうど」や「みやこ」という読みによってアプローチすることを可能にさせるものであり、それは学問に執心する「婦幼童男」の知識欲や学習欲を刺激するものとして理解できるのである。つまり、「西洋昔物語」の文体が宣教師たちの布教の文体であるのに対し、『流別奇談』の文体は学問に励む読者の嗜好に合わせた文体として捉えられる。教授者と学習者の差異はその訳文の文体にも表れているのである。

学習者の文体であることは、「西洋昔物語」には見られない割注や補足説明の存在によっても指摘できる。そもそも、「西洋の紀原千四百年代」や「巴里斯」という設定を加えなければ、説明を付け足す必要はないのであって、これらの設定の追加には、「西洋の紀原千四百年代」や

「巴里斯」を知識の中に入れておこうとする「洋学執心の婦幼童男」の学習欲を満たすものとしての側面が多分にあったに違いない。同様に、「都府」に「みやこ」という読みを付さず、「洛」<sup>みやこ</sup>と言い換えるのも、「都府」が「都会」ではなく現在言うところの「首都」の意味であることを読者に学習させる効果を持つものとして理解できる。

もちろん、以上のような『流別奇談』の翻訳は、訳者から読者へと知識を伝授するものでもあり、本間久雄が『明治文学史』で示したように「啓蒙的翻訳」としても理解できる。しかし、「啓蒙的翻訳」という表現では、「西洋昔物語」における翻訳との差異を表現することができない。「西洋昔物語」の場合、その翻訳は、キリスト教の信仰を広めるべく、できるだけ平易なことばでなされていた。そこでは幅広い読者に思想を伝えることが第一に重視されており、読者が訳文の表現そのものを習得することは特に目指されていない。それに対し、『流別奇談』の翻訳では、読者が訳文の表現を習得することが考慮に入れられている。むしろ、それがどの程度実際の読者たちの欲求に応えるものであったのかは訳文から読み取ることはできないが、少なくとも読者たちの学習熱が存在しなければこのような翻訳が成立しなかったことは間違いない。

そもそも、明治期の松旭は『俊傑神稲水滸伝』の嗣作を続ける一方で、宝文堂から刊行された『<sup>漢語</sup>弁解開明用文章』（明治七年）や『<sup>改</sup>正日本地誌略字引』（明治十一年）などの学習書を編纂したり、明治八年頃に創刊された『錦画百事新聞』の編者となったりするなど、教育関係の出版に関与していた。『流別奇談』の出版に携わったのも、その一環として捉えられる。

明治の学習者に向けて再話された『流別奇談』では、原書の物語に存在したキリスト教の信仰の実践は、より一般的な〈正義〉の実践へと変

換される。聖書は宗教の名が明示されない「経文」(上七オ)に置き換えられ、キリスト教の「神」は明治の人々にも共有される「天」に読み替えられる。

事実、猿を神として祀る黒人の国の信仰を述べる際、語り手は「亜細亜」「欧羅巴」に緯変り昔より天帝をあがむるを「知ず」(上二十一ウ)とし、「亜細亜」を「欧羅巴」と同じく「天帝」を奉ずる側に置く。この「天帝」について、「治安」は「総て神と尊み敬ふ物は天帝と云て肉眼に見る緯能はず仮に日月星辰と顕はれ給ふ是人間の生死を守り又禍福厄災を除招せしめ給ふ」(下一オウ)と説明し、黒人に対して次のように言う。

人は万物の長たる躬を以て獣を信じて辱を知ぬは狗を抱きて臭きを知ざる世の諺にも洩ざる魯阿か実に笑ふに堪たる白痴們向後弊風断然して天帝而已を尊信なす様我々取計ふ処也這旨一統承諾なさば国内安全の基たるべし

(下一オウ)

「人は万物の長」であることを根拠に猿を崇拜することを否定し、「天帝」への尊信を説くこと自体は「西洋昔物語」のジョンと共通する。だが、「天帝」がキリスト教に限定されないものとして扱われる文脈において、「天帝」を敬わない「弊風」は「国内安全の基」を損なう「悪」として意味づけられ、成敗されるべき存在として扱われることになる。

もっとも、原文においても、黒人は「野蛮人」(sauvages (p. 159)) と呼ばれ、人肉を食らう者として描かれており、キリスト教至上主義に基づく差別の眼差しは明確に読み取れる。『流別奇談』では、原文に存

在する「文明」と「野蛮」の対比の上に、「正義」と「悪」の対立が重ねられ、前者によって後者が成敗されるという勧善懲悪の物語への再編が行われたのであった。

このことは、物語の結末の変化において如実に表れる。原文では、人肉を食らう国の王に対し、マリーが父の身代わりになることを申し出たところ、王が感銘を受けて親子の命を助け、白人の船に親子を引き渡す。それに対し、『流別奇談』では、ヨーロッパ軍の侵攻に乗じて、「満利」が王を欺いて殺害する。親子はその「首級」(下二十ウ)をヨーロッパ軍の大將に届け、フランスに帰る。「欧羅巴」を「正義」とし、「阿弗利加」(「阿非里加」)を「悪」とする枠組みの中で、親子が「正義」のために尽くすという物語が新たに生み出されたのである。

「正義」の実行者である父子は、むしろ、文明開化の世において学問に志す読者たちの模範として造型されていた。松旭は序文に次のように記す。

その伝実に倭人の性情にも恥劣なき事感ずるに堪たり親子夫婦の恩愛深情患苦を嘗て志願を遂る蓋勉強忍耐の至誠一にあれば文明開化の聖代披閱の君子ひとへに志を採用あらば編者の幸甚しからむと序す

(序一ウー二ウ)

松旭は父子の行爲が「倭人の性情」にも通じるものであるとし、「文明開化」の世における「君子」たる読者にその「志」を手本とすることを求める。原文では四歳 (quatre ans (p. 157)) の「治安」が「八歳」(上二ウ)と変更されるのは読者の年齢を意識したものと考えられる。

また、最後の章が「立身青雲<sup>しめつせ</sup>の話」とされたように、スペイン人が住む大きな島 (une grand île habitée par des Espagnols (p. 162)) で親子が暮らしたとする原文の結末も、親子が故国であるフランスに帰り、出世を遂げるという展開に改められる。父子の遭難と再会の物語は、故郷に錦を飾るという明治の学習者と共有される「志願」を描く物語へと変更されたのである。

## 五 おわりに

本稿では、「明治初期の翻訳小説として最初のもの」とされる『流別奇談』に焦点を当て、それが明治期の日本でも流行したオレンドルフの学習書のうち、英語話者向けのフランス語問題集に収められる一編の物語を訳したものであることを明らかにした。同時に、『流別奇談』と原書を同じくする可能性が指摘されていた「西洋昔物語」についても、それが『流別奇談』の原書に対応する英語版のフランス語教授本に由来することを示し、両作品がそれぞれ外国語の学習者と教授者の側から生み出されたこと、それぞれの差異が翻訳にも反映されていることを論じた。以上は、従来の研究であまり注目されてこなかった『花柳春話』以前の、黎明期の翻訳小説をめぐる、その成り立ちや翻訳のあり方に関して新たな知見を提供しうるものと考えられる。今後は、翻訳小説がその黎明期において従来の小説とどのように結びつき、文学の領域にどのようにその位置を占めていったのかについて、さらに検討を加えることとしたい。

## 註

- (1) 柳田泉「明治の翻訳文学研究」(『日本文学講座』第四卷、昭和二年二月)、二頁。
- (2) 同。
- (3) 同、四頁。
- (4) 同、四〇五頁。なお、『流別奇談』が最新の発見物であったことは、それが斎藤昌三「明治初期の反訳小説」(『愛書趣味』第三号、大正十五年二月)に列挙される翻訳小説一覧の中にない一方、石川巖編「明治初期戯作年表」(『書物往来叢書』別輯、昭和二年十一月)には含まれることからうかがえる。
- (5) なお、『流別奇談』には明治四年の刊記を有する本も存在するが、石川巖「『西洋孝子流別奇談』に就て」(『明治文化研究』第四卷五号、昭和三年五月)は明治七年の序文を有することから、明治四年の刊記は他の本の奥付を流用したものであると判断する。本論文ではこの説に従い、明治七年の刊行として扱う。
- (6) 石川前掲論文、一九頁。
- (7) 同。
- (8) 『流別奇談』より早い作品に明治五年刊行の斎藤了庵訳『魯敏孫全伝』があるが、これは嘉永年間成立の黒田麴廬訳『漂荒紀事』を訳者名を変えて出版したものである。
- (9) 本間久雄「明治文学史」上巻(東京堂、昭和十年、一八二頁)。
- (10) 藤沢毅「俊傑神稲水滸伝」序論(『読本研究新集』第七卷、二〇一五年六月)によると、明治二十六年から二十八年にかけて扶桑堂から刊行された活字本に第三十編が収録され、完結した。
- (11) 小林謙吉訳『西洋流別奇談』(宝文堂、明治七年)、凡例一丁オ。以下、本書からの引用は本文中に丁のみを示す。なお、【】内は割注を示す(以下同)。
- (12) 柳田前掲論文、六頁。
- (13) 「西洋昔物語」は『七一雑報』の第三卷二十六号(明治十一年六月二十八日)、同二十七号(同年七月五日)、同二十八号(同年七月十二日)、同三十一号(同年八月二日)、同三十二号(同年八月九日)の五回にわたって連載された。以下、本作品からの引用は本文中に掲載回のみを示す。
- (14) オレンドルフおよびその学習書の特徴について、A. P. R. Howatt and H. G. Widdowson, *A History of English Language Teaching*, 2nd ed., Oxford: Oxford University Press, 2004, pp. 161-165 参照。
- (15) Howatt and Widdowson, *A History of English Language Teaching*, pp. 158-159.
- (16) H. G. Ollendorf, *Key to the Exercises in the Method of Learning to Read, Write and Speak a Language in Six Months, Adapted to the French*, London: Whittaker And Co., Paris: Ollendorf, 1890, p. [1]. 以下、本書からの引用は本文中にローマの

を示す。

- (17) 日本におけるオレンドルフの教授法および学習書の流行については、金沢朱美「オレンドルフ教授法の考察——井上勤ならびに岡倉由三郎を中心に」(『目白大学人文科学研究』第三号、二〇〇六年七月)、平賀優子「日本英語教授法史における Ollendorff 教授法の位置づけ」(『日本英語教育史研究』第二十三号、二〇〇八年五月) 参照。
- (18) 井上勤訳『六ヶ月間英語卒業書』(兎屋書店、明治二十一年) 一頁。
- (19) H. G. Ollendorff, *A New Method of Learning to Read, Write and Speak a Language in Six Months, Adapted to the French*. London: Whitaker And Co., Paris: Ollendorff, 1857, p. 468. 以下、本書からの引用は本文中にページのみを示す。
- (20) たとえば、マシーノックの D. Appleton & Company が一八六六年に出版したものは第一課に“The broom,” “Le balai.” が見える。
- (21) 紅林員方訳『六月卒業英学自在』(中近堂、明治二十一年) 七一頁。
- (22) 『文部省第二年報』(文部省、明治八年序)、附録三〇頁。傍線は原文。
- (23) 平賀前掲論文、七八頁。
- (24) なお、明治元年から五年まで存続した静岡学問所の蔵書にはフランス語話者向けの英語の学習書 *Nouvelle méthode pour apprendre à lire, à écrire et à parler une langue en six mois, appliquée à l'anglais* の一八六三年刊本が収められる(『江戸幕府旧蔵洋書目録』静岡県立中央図書館蔵文庫、一九六七年、五四頁)。
- (25) H. G. Ollendorff, *A New Method of Learning to Read, Write and Speak a Language in Six Months, Adapted to the French*. London: Whitaker And Co., Paris: Ollendorff, 1857, p. 468. 以下、本書からの引用は本文中にページのみを示す。

引用に際して、旧字体を新字体に改めた。また、ルビは適宜省略した。

#### 【編集委員会特記事項】

本稿は、本委員会による厳正な査読を経て掲載に至った論文であることを証する。

日本文化学科主任 青山英正  
紀要編集委員長 古田島洋介